

リプライ

## 安部芳絵氏の『「発達障害」とされる外国人の子どもたち：フィリピンから来日したきょうだいをめぐる、10人の大人たちの語り』の書評に答えて

金 春喜

「本書には、子どもの声は登場しない」。「きょうだいがどうしたかったのか、何を望んでいたのかは最後までわからなかった」。——本書の評者、安部芳絵氏はそう強調した。

ただ、実はこれらの指摘は、事実誤認や研究倫理の軽視を言い含む。著者として、そのままにできない。そう判断し、今回の「リプライ」の投稿を決めた。ポイントは3つある。

1つ目は、評者が早計に「子どもの声は登場しない」と誤読していることについて。本書では複数のページや場面で、インタビュー協力者の教員や保護者たちによって話された「子ども本人の希望」について記述している。これらを読者が読み取ることで、子どもの希望を汲むことは十分にできる。

たとえば、きょうだいは次のように周囲のおとなに話していた。「特別支援学校ではなく普通の高校に進学したかった」(p.143)、「普通高校への進学は諦めた」(p.143)、「友達と同じ学校に進学したい」(p.174, p.180)、「(特別支援学校の卒業生には手の届かない) 消防士や海上保安官になりたい」(p.178)、「最終的に進学した特別支援学校で介護を学びたい」(p.139) ——。

これらを「声」と認めないのは、評者が本書を読む間、インタビュー・データにあらわれる子どもの声を軽視していたからか、調査者自身が子どもに直接インタビューしなければ、子どもの声を聞いたことにはならないと考えているからだろう。もし後者だとすれば、次の問題点につながる。

2つ目の論点は、調査倫理にかかわる。本書で子ども本人へのインタビューを試みなかったのは、子どもの意見を軽視したからではなく、調査倫理上の制約が大きかったためだ。

相手は、フィリピンの少数言語を母語とするきょうだいだ。フィリピンの公用語の通訳を挟んだとしても、あるいは日本語だとでも、踏み込んだ対話に限界があることは、本書で複数の教員た

ちが言っている。そんな子どもに、一体どのようにして調査の目的や方法論を伝えることができると、評者は考えているのだろうか。どうすれば、こちらの意図が「適切に伝わった」と確認・確信できるのか、本人が「イエス」と答えたとき、それが「十分理解した上での承諾」であると、どうやって認められるのか。

こうした「インフォームド・コンセント」の問題は、決して逃れられない。切り抜けることも、相当に困難のはずだ。もしも調査者側の大義名分で無理に押し切ろうとするなら、それこそ子どもの権利の侵害につながる。

さらに、本書で注目する子どもには、形式的だとしても「発達障害」との診断が下っている。つまり、相手は「『発達障害』があると認められている外国人の子ども」。そんな子どもに対し、いかなる口実があるにせよインタビュー調査をおこない、その結果を公に発表することには、あまりに大きな倫理的な課題が伴う。

評者がそのことにまったく関心を寄せず、本書について「子どもの声もない」と強調することは、「同様の調査研究をする場合には、子どもの声を直接聞くこと、つまり子ども本人をインタビュー調査の対象とすることが必要」との誤解を招きかねない。そう書くのであれば、せめて倫理的な課題の乗り越え方を示す必要があった。

3つ目にあげたい最も重要な問題は、「子ども本人の本物の意見・最善の利益」を、誰が、どのようにして、決めることができるのか、という根本にある。すでに説明したように、きょうだいが表明した自分の意見や希望は七変化していた。おとなに語られる子どもの意思是、相手やタイミングやシチュエーションによって、大きく異なる。そのどれが、つまり誰が聴き取った意見が、「子ども本人の本物の意見・最善の利益」にあたるかを、誰が、どのようにして判定できるのだろうか。調査者や研究者なら、できるというのか。もし仮

に、そんな決定権を持つおとながいるなら、同時に伴う大いなる権力に反省的でないといけない。日本の教育現場で劣位におかれがちな外国出身の子どもが相手なら、なおのことだ。その決定権者は、外国出身の子どもが優位な立場の日本人のおとなに対し、どれほど本音で語れると思っているのだろうか。

ただ、評者は、その点にはまったくふれないまま、こう付け足す。「ここから先は、子ども支援の施策として引き取るべき課題」だと。

つまり、評者のように、この問題を子どもの支援の施策として引き取れると思っている者、すなわち子どもの権利の尊重が大切だと理解している学者や支援者や政策立案者たちならば、適切に外国出身の子ども意見を把握し、尊重し、最善の利益を守れる、との自信があらわれている。そういう者は、外国出身の子どもに対する権力を持ってよい、と肯定する姿勢もにじみ出ている。

だが、そのような立場に身を置きたいならば、たとえ調査者で著者の私であっても、そのほかのいかなる研究者や、教員や保護者などの身近な人であっても、外国出身の子どもには決して乗り越えられない権力を持つことを、自覚しなくてはならない。それに気づけなかったおとなたちの行く末が、本書の結末でもあるからだ。そのことは本書にも書いている（第6章）。

もちろん、子どもの本心を知ろうと努めることは、どんな場面でも最重要だ。だが「私（たち）」なら子どもの意見を適切に把握して尊重できる、という単純で慢心がすぎる前提とは、距離を置く必要がある。そう考える人物こそ、様々な場で自分以外に語られた子どもの希望をもできる限り収集することに努め、どれか1種類だけの語り方に依拠せず、慎重に判断してほしいと思う。

どのように「引き取る」つもりなのかも疑問だ。評者が次のようなことを書いているからだ。「子

どもの権利の観点から、外国人の子どもたちを考える際には、「子どもの権利」領域の中心にいる荒牧重人氏や平野裕二氏による）論文集が役立つ」と。

私も拝読したが、残念ながら、そこには外国人の子ども教育を受ける権利についての解説こそあれ、日本語を母語としない子どもの意見の尊重の仕方にはまったく踏み込まれていなかった。両者とも、日本人の子どもを想定している考え方や方法、あるいは外国出身のおとな向けの仕組みなどを紹介するにとどまる。これまでの『子どもの権利研究』も同様の限界に達している。

この課題に向き合った経験や知見の蓄積がきわめて少ない領域で、はたしてどのように「引き取るべき」か。当事者のリアリティを掴み損ね、この場で私が指摘したような論点を一瞥すらできなかったのが実情ではないか。

「もやもやする本である」。安部氏の書評は、そう始まる。ただ、何が「もやもや」したのかは、明確に書かれていない。14段落中10段落は内容の要約、1段落は上記の上述の論文集の宣伝、1段落は周知の公的統計等の紹介であり、「評」と言えるのは2段落のみ。そこでは「子どもの声がない」という指摘に終始していたので、おそらく「子どもの声がない」ことに「もやもや」したのだろう。このリプライが、少しでも評者の「もやもや」の解消につながれば幸いだ。

本書を「子どもの権利」の観点から注目する必要があると判断して本誌で取り上げていただき、編集委員会や評者に感謝を申し上げたい。本書で描いた教育実践そのものについて、「子どもの権利」の観点からはどんな問題や課題を指摘できるか、あるいは、外国出身の子ども意見の尊重というテーマについて蓄積の少ない自らの領域は何から始めるべきか、を論ずる評を読めていたら、著者としても大変勉強になっただろう。